

がんサバイバーの社会役割と治療の調和に向けた看護アルゴリズム支援の評価

菊地 沙織¹, 京田亜由美¹, 藤本 桂子², 吉田久美子², 清水 裕子³, 神田 清子¹

- 1 群馬県前橋市昭和町 3-39-22 群馬大学大学院保健学研究科
2 群馬県高崎市中大類町 501 高崎健康福祉大学保健医療学部看護学科
3 群馬県前橋市上沖町 323-1 群馬県立県民健康科学大学看護学部看護学科

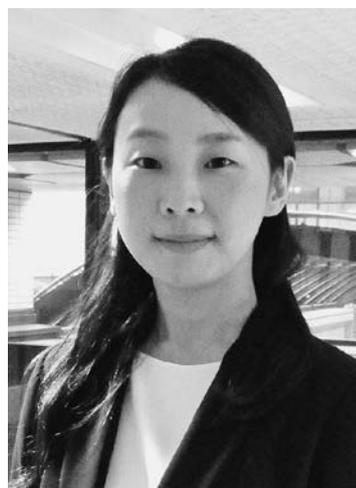
文献情報

投稿履歴 :

受付 令和 2 年 11 月 20 日
採択 令和 2 年 12 月 3 日

論文別刷請求先 :

菊地沙織
〒371-8514 群馬県前橋市昭和町3-39-22
群馬大学大学院保健学研究科
電話 : 027-220-8818



緒言

がん化学療法や放射線治療は外来での施行が主流となり、がんサバイバー(以下サバイバー)は地域社会でそれぞれの役割を果たしながら治療を受けている。サバイバーにとって、社会的な役割を持つことや家庭内での役割を果たすことは自己存在価値を高めることにつながる。2014年に策定されたがん対策推進基本計画にも、がん患者の就労を含めた社会的な問題の解決を目指した個別目標が掲げられており、がん対策の重点課題である。

この課題解決の一端を担う医療者が外来看護師である。外来看護師は、通院するサバイバーの治療による副作用症状や社会生活を送る上での悩みや問題をとらえ、支援することが求められている一方で、サバイバーの社会的背景を踏まえた支援に至っていない現状もある。

これらを踏まえ、筆者らは、がんになっても社会役割と治療の調和をはかれるような看護支援の道筋を可視化し、外来看護師の誰もが実践できる「がんサバイバーの社会役割と治療の調和を促進する看護アルゴリズム」を開発した。

本研究は、がん治療に携わる外来看護師の社会役割と治療の調和に向けた看護アルゴリズムを使用した支援を評価

し、アルゴリズム導入に向けた示唆を得ることを目的とした。

方法

本研究の研究デザインは、対照群を置かない介入研究である。

1. 研究対象者

A 県内の都道府県がん診療連携拠点病院と同等の病院の計 3 施設の外来化学療法室、外来放射線科に勤務する看護師 30 名程度

2. データ収集方法

研究対象者に、看護アルゴリズム支援を約 4 か月間実施してもらった。アルゴリズムを使用することへの同意が得られたサバイバーに対し、約 2 か月の看護アルゴリズム支援を行った。支援終了後には対象者が所属している部署毎にフォーカスグループインタビューを実施した。

3. 調査内容

主な調査内容は、外来看護師の基本情報と、アルゴリズム使用後のサバイバーに対する支援への思い、考え、行動の変化や効果についての自由な語りを促した。

4. 分析方法

フォーカスグループインタビューで語られた内容から逐語録を作成し、アルゴリズム使用による外来看護への効果について語られている内容について、Berelson.Bの内容分析の手法を参考に分析を行った。

結果

1. 対象者の背景

研究参加の同意が得られた対象者は28名で、外来化学療法室に勤務している者が22名、外来放射線科に勤務している者が6名であった。対象者のうち看護師経験年数が10年以上ある者が7割を占めた。

2. がんサバイバーの社会役割と治療の調和に向けた看護アルゴリズム支援の評価

対象者の語りの内容分析の結果、51記録単位から49コードを抽出した。それらは最終的に10のサブカテゴリー、3のカテゴリーに集約された。以下、サブカテゴリーは〈 〉で示している。

1) 社会で生活するサバイバーを統合的にみることが可能になる

このカテゴリーは、〈今までサバイバーに聞きにくいと感じていた内容の情報収集ができるようになる〉、〈治療に伴うサバイバーの状態変化や考えを系統的に捉えられるようになる〉等の4つのサブカテゴリーで構成された。

2) 多職種をつなぎ支援の方向性を共有化できる

このカテゴリーは、〈アルゴリズムによって看護スタッフ間で支援の方向性の共有ができるようになる〉と〈多職種をつなぐための根拠や道筋が明確になり、連携がとりやすくなる〉の2つのサブカテゴリーから構成された。

3) 外来看護師としての自己効力感が高まる

このカテゴリーは〈アルゴリズムが自分の看護支援の裏付けにつながる〉、〈サバイバーの背景を把握して支援したことで、サバイバーとの関係性がさらに良好になる〉、〈社会的役割を支持できるという外来看護師としての自信につながる〉等の4つのサブカテゴリーから構成された。

考察

1. 社会で生活するサバイバーを統合的にみることが可能になる

本研究の対象者は、看護師経験年数が10年以上の者が7割を占めており、達人看護師に該当する。そのため、サバイバーの身体的・精神的な変調を捉える困難感は少ないことが推察できる。しかし、就業や経済状態に関することに対しては、踏み込みにくさを感じていた。本アルゴリズムを使用することで、聞きにくい話題を切り出すきっかけになっていた。低所得者や老老介護中の高齢者、就労と育児を両立している者がサバイバーとなった際、それぞれが抱える問題は多様かつ複雑である。アルゴリズムはこのような複雑な背景のあるサバイバーに対する介入の糸口を提示できた。

2. 多職種をつなぎ支援の方向性を共有化できる

高度化が進むがん医療において、サバイバーを多角的に支援していくことがより一層求められている一方で、外来看護師は、他職種・他部門とどのように連携をとればわからないという困難を抱えている。これに対し、本アルゴリズムは、サバイバーが直面している問題を捉えた後、どの部門に連絡・相談依頼をするのかを系統的に明記しているため、スムーズな連携を可能にする。加えて、サバイバーの変調に合わせて使用するアルゴリズムを変更させていくため、外来看護師間の支援の方向性を共有するためのツールとしても活用可能である。

3. 外来看護師としての自己効力感が高まる

本アルゴリズムに記載されている支援内容は、外来での通常の看護が反映されており、臨床での汎用性が高い。対象となった外来看護師は、研究を通じて特別な看護を実施したわけではないが、アルゴリズムを使用することで、サバイバーの生活と治療を両立するために行っていた今までの看護実践を再認識することができた。それにより外来看護師としての自己効力感を高めることにつながった。

4. 看護支援アルゴリズム導入に向けた示唆

本アルゴリズムを今後様々な施設で導入していくには、まずは外来看護師の役割を連携先の他職種・他部門に周知し、具体的な連絡方法等を整備していくことが必須である。さらに、施設によって他部門との連携の方法が異なるため、アレンジ可能な様式を検討する必要がある。加えてサバイバーや他職種からの反応を評価し、フィードバックすることでアルゴリズムを改良し実用化が期待できる。